〈資料紹介〉翻刻『振袖天神記』（上）

翻刻の会

一、底本には京都府立総合資料館の七行九十一丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1　本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2　各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（　）で示した。

3　仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4　漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6　特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7　畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〳〵」はそのまま残した。

8　文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

古家尚斗、石橋佐紀子、井上真理、永冶緑都、御手洗靖大、永田英生、竹田奈央、竹田有希。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

翻刻の会

誕生梅 蘇生松 振袖天神記（上）

序詞 皇親神漏岐神漏美の命に詔ましまし。吾皇御孫の尊をば豊葦原の水穂の国を。安国と平げくしろしめせと。児屋根の臣の祓より八隅の波の上筒尾。偏ならず倚よらぬ其中筒尾日の本の。恵になびく民草や。水の尾の帝の御いさほし。ヲロシヘ波も静けき。春とかや。

然るにいかなる聖運にや。帝去ン（1オ）ぬる冬よりも御心地例ならず。諸寺諸山ンに御祈祷あり。摂関の輩に政務を予達し。大納言橘宗岡紀ノ中将実定。奉幣使として九重の都を出て津の国や。津守リの浦の夕なぎに円座を敷キもふけ。御供には百済の河成良峯舎人之助永久。其外六位の下官ン迄。神に祈の大幣に神慮を。窺ふ計リなり。

地色ハル 中にも河成すゝみ出。君御齢未御盛にましませ共。御多病におはします上。物の恨有ルやらん。此度の御脳（1ウ）神すゝしめの湯を上ケれ共。其験候はずと神ン主が訴へ。神慮覚束なく候と。申上れば紀の実定。ヤヲレ河成リ。一ッ天の御主シに物の恨なんどゝは下々の俗説。神ン明の御心に何とて左様の事あらん。うかつの事な申シそと聞もあへず大納言。イヤ〳〵夫レは実定の一概な了簡。天子は民の父母国の安危は上一人ンの身にかゝる。上ミ其徳を失へば物の恨なし共云れず。思ふに帝御幼稚の折から。未御位定らざりしに。御邊の父がはからひによつて。兄宮をのりこへて十善の位に即（2オ）給ふ。然れば是自然とあたふる天位にあらず。此義神ン慮に叶はぬ事有ルまじき物ならず。頃日陰陽の頭が勘文。天子の御脳は日ッ月の煩ひ。御身のかたしろと成べき日ッ月の御簇を。伊勢天照太神ン宮へ暫く奉納なし奉り。玉体を祈給はゞ必御快全なるべしと占ひの面理に当れり。則チ此奉納の役目百済の河成リに申付る。都に帰り御簇を受ケ取。勢州へ赴べ

し。ハヽア畏り奉ると。しめし合せし佞人の。詞の端はいぶかしながら。玉ク体安ン全の祈と有レば太切ッの奉幣使。殊に（2ウ）錦の御簇を守り奉る此役目一人にては覚束なし。舎人之助永久両人立合奉納せよと。聞もあへず河成リ。仰を返すは憚りなれ共。若輩の舎人之助有ルもないも同し事。是式キの役目此義は我等一人に。仰付ケられ下されよと。人をさみする無礼の詞。聞兼て舎人之助。我カ父は良峯左衛門宗貞逃名をしられし侍イ。今武士を捨て仏ッ門ンに入。僧正遍正と改むれば若年なれ共父が名代。跡目を勤る舎人之助人もなげなる河成殿。中将の仰有ル上は。是非此御役目は某にと。頻て願ふ二人が争ひ。

下司の官人ン（3オ）馳参ンじ。当所堺の浦此程の大時気に。吹キ流されたる大船小船数多有ル其中チに。日本に見なれぬ外国の船一艘流レ寄リ候。アレ〳〵御覧候へと。いふに人〳〵延あがり見やれば実も海原に。釣するあまのわざならで。頭に鳥砂帽襴衫の。姿異なる外イ国人ン。

河成打笑。百済渤海の類にあらず。是唐朝の風俗。我日頃鍛錬せし唐音ンを以ッて試んと。船に向ひ両手を上ケ。何かはしらぬ唐土詞。受ケつ答へつ和漢の礼義互の挨拶事終り。

唐土の商人船明州の津より悪風に出合。吹キ流されしとの申シ条相違有ルまじ。異国の者我カ国に来り（3ウ）なびくめでたき吉瑞。君の御脳も御平癒に程あらじ。此趣禁中へ奏問有て然るべしと。いふ間あやしき神ン前ンに。さつと吹しくはやち風。しらゆふならぬ白鷺の矢をゐるごとく飛去レば。

中将きつと見。世の常ならぬ神風に此社のつかはしめ。翼を乱し都の方へ飛去リしは。君の凶事を白鷺が。実定は片時も

早く立帰つて禁中守護。永久来れと宗岡に。式ヰ礼延て飛鳥の羽音トを慕ひ帰らるゝ。

河成リあたりを見廻して。船に向カつて唐土人是へ〳〵と指招き。最前ン唐音にて問答致せば。彼レは元ト日本にて巨勢の金岡といつし者。先ン年ン（4オ）入唐して画工の奥義を究只今帰朝せし由。異国の法に人形を絵に書ィて調伏する秘伝有。此河成も絵の道を修行致せど此法未伝授せず。幸ィかな今上皇帝。彼レに調伏致させなばいかなる貴僧高僧が。御脳平癒の祈はなす共。三日が内に御命を断ん事掌をさすがごとしと。聞クより宗岡喜悦の眉。出来た〳〵。帝さへ失へば兼て計リ置ヰしごとく。尊強法親王を還俗なし奉り。四海ィの政道我々が思ふ儘。太切ッの希人館へ同道。密々に事をはからんいざ来れと。いさむ非道の宗岡に。倭唐土隔たれど八重の。汐路を九重（4ウ）の。雲井に沖津白波や。神慮はいかに。住吉の。宮居はるかに。三重へ行空の

爰ぞ都の了安寺。たうとき事は門ン外も。奇麗に箒目掃ちぎり。けふ禁庭のお客入。早御立と門ン内より。当帝の兄尊強法親ン王。大納言宗岡御供し。前後を武士にはらはせて。さもいかめしく出来り。

宗岡あたりを見廻してお傍近く小声に成。今ン朝此寺において河成舎人両人共。役目の義申合せ。勢ィ州へ発足致す答。夫レ故にけふの立合ィ。舎人之助めが傍におる故。内々の事書状に認め。河成に申付ヶ置。追付君を一天下の主シと仰奉る。御心安ふ思シ召セと。詞に親ン王（5オ）安堵の顔色。ホヽ何事も時来れり追ッ付ケ本望達ッすへし。必油断有まじと。仰を聞て大納言。是よりは我館にて何かの事申シ談し。禁庭へ御供せん。御輿の供廻りあれに控へさせたれば。いざ御出と小松原足を早めて帰りける。

こなたの道へ。鋲のり物。菅原是善卿の奥方久がた御前。跡に付キ添家の雑掌白井太郎武任。しばらく爰にと御乗リ物御寺近カくかき居させ。御機嫌伺ふ妞共。戸を押シ明クれば立出給ひ。

武任を招き寄セ。けふ御先祖の忌日に当タり了安寺への参詣。其方を招シ連レたは思ふ子細有ての事。此間禁庭より我夫マに参内せよとの御使。度々に及べ共。（5ウ）大納言の計ひなれば返答にも及ばずと。参り給ふ気色なく物堅き是善卿讒者の口にかゝり給ひお身の障りも計らんず。事なき中其方をお請の使にやらん為。此所迄召シ連レしと。聞て武任すゝみ寄リ。是は奥様の御意共覚ず。大納言が悪ル工。御主人ン深い御所存ン有て参内の御沙汰なし。讒者原のはからひ打やつて置イた迚。何程の事あらんと。例の強気を奥方せいして。ヤレ武任。我レ正直キを元トとして。世間ンをしらぬ心得違ひ。何にもせよ一旦は御請をするが臣ン下の道。主人是善ン長病なれば。何事にても私に仰付ケられ下されと。お受ケのお使サア〳〵早ふとの給へば。

ぜひに及ばず承はり。仰の通リ申シた（6オ）上。違背あらば百年ンめ。どいつもこいつも。撫切リソレ夫レがやつぱり短気者。其方も過キつる比。自が手廻りの妞くれはと密通し。既に事に及ぶ所くれは計リ暇をやり。我カ計ひにて済せしが子も有とやら聞つるに世上の事も思ひやり荒気を止よと教訓の。詞に武任ハ、其女めが事に付。一ッ生忘れ置カぬ御慈悲。お暇を給はる後チも。お家で不義の女なれば中〳〵添さぬ母の気質。是非なくも別ッ家に置悴レを養育仕る。某が性として義を見ては前ン後を忘れ。命を惜まぬ短慮の程。向後は相嗜今日のお使も。首尾よう仕課せ申べし。ヲ、夫レ々夫の不念ンにならぬ様合点か。早々急げ（6ウ）と久かた御前。御寺の方へ武仕は。別れてこそは急キ行。

さとかほる衣の追風。絹かづき。雲に隠せる月の眉。菅原の深窓に。桂姫と聞へしは。世に類なき媚容かるき出立チの供廻り。御寺程なくあゆみ寄り。

かたへにイコレ青柳。けふ此お寺へ舎人様。旅立の用意に付キ。来てござるとの噂を聞。逢せてやらふといやつた故。館を密に道々も母様のお墓参り。ひよつとお目にかゝつたら。どふ申たらよからふと。案じ給へは。お気づかひなされますな。ツイわたしが口先で。あんまりお留守が淋さに。お迎ひがてら参つたとのふしほり殿そふでないか。ヲゝそふ共〳〵其事より。案ンじられるは舎人様。こちらが呼に行れは（7オ）せず。どふしたらよからふぞ。爰らが智恵としほりが思案。姫も倶々案ンし顔三人寄た文珠様。みめよき眉をひそめゐる。

折から出る舎人之助。恂り見合す顔と顔。お前は舎人様。桂様かと立寄レど。姫はとかうの詞さへまだ初ッ恋の薄紅葉。下にこがれて。ことばなき。

青柳が引ッ取て。イヤ申舎人様。文の取やりお互に心の底は解ながら。ほんまの事かなふては済ず。どぶぞしてとこつちは気もせ。夫レにとんと此比は何ンの便リもなされませぬ。お姫様の名代にわたしがお恨申ますと。すねた詞にしほりも指出。水くさいなされかた。お姫様も直キ々にちつとお恨遊ばせと。押シやられて桂姫。お便りのない其上に伊（7ウ）勢へとやらお出の噂。しらせても下されず。つれないお方と寄添てこぼれかろし。笹の雪。さはらばとけん風情なり。

舎人之助持テあくみ。三人寄レはかしましととんとおれに物を云さぬ。此間より此舎人禁庭の用事しげく。即今日此寺にて申合せ。相役の百済の河成リ此所から追ッ付ケ旅立。我レは是より館へ帰り跡よりの発足。大津の宿リて出合筈。相役を先キへ

やるも。そもじにちよつと逢ん為。必恨給ふなと抱しめたる恋衣。此境内のおし鳥も。及ばぬ中と見へにける。
青柳目早く御門の方。コレ母君といふ声に。隠れん方も姫ゆりの露の。舎と乗リ物へ。舎人之助は戸を引キ立息を詰たる程
も（8オ）なく。久かた御前ン立出給ひ。コレハ〳〵桂姫。若子のかる〴〵しう歩路を拾ひ。何用有て此御寺へ妞共も嗜
るめと咎給へばイヱ申。あなたにはお墓参り。余りお留主が淋しさにお迎ひかてら此寺の。おし鳥も暫シが程御見物がさせ
ましたい。あなた様には先ッおさきへ追付御供致さんと。いなせたがるも推量のとふかこふかと久かた御前。コレ姫もよう
聞きやや。あのおし鳥といふ鳥は雌は取分ケ執念強く。雄の傍片時も離ず。たはれあふては矢に当り。網にかゝるもし
らぬとや。此鳥を詠めても若き人は心のいましめ。よう合点したがよい。惣して夫を持ぬ女は仮初の物詣にも人に面テを見
（8ウ）せぬが嗜。わらはか歩でもくるしうない此乗リ物に桂姫。乗せて跡から供して帰れ。父御のお耳へ入ぬ先キ。必早
ふと子にあまい。親心には上下なく。詞残して帰らるゝ。
サア〳〵是からお姫様。お旅立の暇乞とつくりとなされませと。姫を押シやり。乗り物へ入レ参らせて戸をひつしやり。二
人リはこなたにつぶやきさゝやきしほりは指足耳を寄セ。立チのいては袖を覆ひサアけしからぬ御機嫌じやどれ〳〵わしもと
青柳が。立チ聞ク胸もどつきどきコレ〳〵しほり殿今が三千世界の集る暇乞の最中と。そゞめき立て二人共。貰ひ上気と見
へにける。
寺内の方より百済の河成。人を見下す権柄眼コ。ヤイ女原。勅諚を承はり勢州へ罷リ（9オ）越ス身が供先キ。乗リ物に
乗リちらし挨拶もせぬなめ過キた女。是へ呼吟味すると。女と悔り勅諚ごかし。聞て恟り青柳しほり。乗物かこひ立寄ッ

て。私が主人の姫お寺のおし鳥見てゐる内。ぞつとしたははやり風。其次が腹いたでびく〳〵虫がおこつた故。無躾ながら乗物で今養生の最中故。思はぬ無礼は幾重にもお赦しなされて下さりませホ、、、御了簡のよさそふな情らしいお顔付キと。たらしかけられ河成は。年シに似合ぬ女コ好。了簡のしにくい場なれど詫言の仕様によつてどふなりとしてくりよと。こわい尻目を青柳がもたれかゝつて我身を覆ひ。しほりに眴河成が。傍へひつたり（9ウ）ヲゝ嬉しよう御かんにんなされました。其お礼には数ならねど此身をお任せ申ますと。中にはさんでめんないちどり。其間に舎人は松かげへ。姫はすつぽり絹かづき。

河成リは手をはりのけてむくりをにやし。女じやと了簡して。大目に見れば付キ上つて御用の妨。家来来れと呼出し。大津迄ぽつ付ィて。宿々も油断なく舎人之助を跡に置キ。とちめんぼうふらしてくれん。ゑしれぬめらうめにかゝつて。存ジの外日がさけた。烈を正して早急げと。何がな我慢の河成リは。虎の威をかる鎧印シ大津をさして急キ行。

やり過して舎人之助。扨々ひあいなめにあふた桂殿にも先ッ館へ。我も急いで立帰り大津迄打立タんと。歩むこなたに落（10オ）たる一ッ通。合点行ずと封押シ切。何々此度伊勢発向の事。社人渡会の春彦は菅原家へ所縁有ル者。必油断有まじく候。河成殿へ宗岡。ムゝ何にもせよ悪ヶ事の密書。よき手がゝりと懐中し。いつ迄も尽せぬ名残リ暫しが間随分ン堅固。お前も御無事で。せめてマアお館迄は見へ隠れにさらば〳〵とゆふたすき伊勢路の別れ名残リの袖。早かき上クる陸尺共。乗物ながら見かへる姫陸に。別るゝおし鳥の。思ひを千々の水放れ館をさしてぞ。三重へ立帰る。

百敷はいつもめでたき物とのみ。賤の心に引キかへて。十善ン万ン乗の御身にも生ケる習ひは是非もなや。帝御脳尋常なら

ず。諸山ンの高僧三社の（10ウ）祈念更に験なかりしが。
僧正遍照に勅有ッて。玉ク座近カく平癒の祈。三鈷の音や法リの声。護摩の煙に九重も物すごくこそ覚へける。
帳裡の通ひ宮仕へお局達チ寄つどひ。玉橋様何と思シ召ス。此度上ェの御脳何の験も見へさせ給はず。今ン度の祈リ遍正様で。どふぞ御平癒有ル様にと噂取々お局頭。定メて今度の御祈祷で日を待ず御快気あらん。殊に上ェ人様の御覚よきお気に入の実定殿。お褥近カふ御看病。万ン事の手筈油断なければお心安ふ思シ召シ。今日ンは彼兄親王の尊強様御入との噂有リ。日比まさなき御生レ立御心に障なば。アヽうとましやと噂の折から。尊強法親ン王御入リと官人（11オ）の取次に。局は心得帳台へ打連レてこそ入にけり。
出向ふ公卿は紀ノ中将実定。となたの方より入来る。当帝の御兄親王尊強親ン王。さも殊勝げに法衣の姿。跡に続て大納言橘の宗岡。上座の方へ押シ直り互に礼義事終リ。
宗岡中将に打向ひ。今ン日帝の御脳いかゞ入せ給ふぞや。兄の親王にも世に頼みなう思し召れ今日の参内也。様子いかゞと尋れば実定謹で。尊強親王御入輿有ル事。帝にも嘸御満悦。扨御ン脳の御気色は前にさして相変らず。此度遍照平癒の祈リ。今日則チ満ンする七日。丹誠のしるしを待チ奉ると述らるれば。大納言眉をひそめ。イヤサコレ実定殿。頼まれぬは人（11ウ）の命。何の手充も覚悟もなくとやかういふ内崩御あらば。普四海はくら闇同前。所詮叶はぬ御脳の様体。何か扨置キ。是にござる親王様還俗をさせまして。位につかせ奉るが何よりの近カ道。夫レ故菅原是善へも参ン内の旨申遣はす。急いで此親王様に御位譲るにしくはなしと。押シて工の落し穴さぐらん物と紀ノ中将。さはらぬ体に平伏し是幸ィの御沙汰ぞ

や。親ン王様の思し召いかゞあらんと伺へば。法親ン王進寄リ。我当帝の兄として四海をしるの人にあらず。夫レ故にこそ自悟。仏に帰依し髪をなぎ。法衣を着せし身を以ッて再ひ位に即ん事。思ひも寄ラす浅ましと。さも潔くの給ふにぞ。実定重て。左程（12オ）に思ひ取給ふを押シて申スも恐れ有。此上は中将が聊はからふ旨有と。御殿ンの方に差向ひ。玉橋のお局其外の官ン女達チ。何れも是へと招れて。数多の局打連出何事ぞふと居ならべば。親ン王始メ大納言ン。目と目を見合せ。不審顔。実定声をひそめ。各〳〵帝のお傍を勤夜ルの御殿の宮仕へ。若シや帝御幸なり御胤を嫉せし方覚あらば聞たしと。尋に局は見合す顔。中にも若き荻の戸は衣紋繕ひ差寄て自は取分てお身近カふ召サるれど。左程の事覚へなしと答る次は土佐の局上がり額の馬顔に。厚き口紅粉。ホ、、、久しうお傍に付キ添ど。終にやさしいお詞も是程人の好物を。どふしてあなたはお（12ウ）嫌ひと。身につまさるゝ恨言其外覚なき由を。お局頭玉橋より一チ々に述らるれば。大納言ゑせ笑ひ。何事かと思ふたら珍らしい子胤の吟味。帝の胤をやどしたかと一チ々官ン女を詮ン義せば。何者の胤にもせよ。孕んだを幸ィに贋物をくはすは必定。是禍を招に似たり。局達チに用はないとつとゝ御殿ンへ行れよと。一ト口に云ほぐせば。お局達チは立上り。今に始メぬ宗岡が過言を譏も口の内。目引キ袖引キ入にける。

思慮有ル実定気色もかへず。然らば猶も別ッ殿ンにて。密に評義を定むべしいさ先ッお入と親ン王に礼義をなして立上れば。宗岡心に打黙き。猶予せられぬ四海の大事。急で評義なすべしとおのが逆（13オ）意の尖矢に心の。的の法親王。義を張弓の中将に打連レ。てこそ入にける。折もこそ有レ。中門ンの方騒立。雑式官ン人かまびすく下カれ〳〵の声の先キ。遠慮ゑしやくも荒くれ親仁。肩に重荷を山枴。片荷に惟子暖かに火燵の櫓を駕がはり。跡には黒木紙袋ちりの粉麦豆在所に

は。似合ぬ女ぼつとり風打連レ立ッて入来る。
侍ィ頭樒木玄番声をかけ。コリヤ〳〵下郎め。爰はうぬどこだと思ふ。儕レこりや乱性者。下カらずは肭切さげん。ぶてよ
擲けと大勢が追ッ取巻ケば。ヤアゑいと。荷をおろして一息つぎ。コレ〳〵気遣ひとは何ンの事。さつきにからいふ事をとつ
くりと聞もせず。杖の棒のとやかましい。内裏様の侍にはすつきり（13ウ）耳がないそふな。大納言ンとやら小豆とやら。
紀の国みかんの中将殿。此二人リに直キにあふて。太切ッな事咄すのじや。皆そつちの為に成ル事。夫レに何ンじや下カれ〳〵
と。おれが下つてよい物か。此黒木や紙袋は近ヵ付への土産物。やらぬ先キにマア爰へ。気がせいて〳〵大ていの事ちやな
い。紙袋へさはつてはつたいこぼして貰ふまい。コリヤ娘こはい事も何ンにもない。気遣ィせずとマア休めと。内裏に恐れ
ぬむさ親仁。興さめてこそ見へにける。
玄番猶も声あらゝげ。蝿虫のほうげたから様々の雑言と。鍔元トに手をかくれば娘は恟り。サア帰れなら帰リます。マア
待ッて下さんせと。とゞむるあなたの御張の内。ヤレ早まるな暫く待テ。其下郎に（14オ）対面せんと。大納言宗岡実定共
に立出れば。玄番を始メ待ィ共はつと。表へ扣居る。
大納言声かけヤイ下郎めよつく聞ケ。斯いふ宗岡是にゐらるゝが中将実定。有乱がましき事あらば。耄迚も赦さぬと。に
らみ付クれば中将押シとめ。今彼レが眼コざし。全く狂気の者にあらず。匹夫なれど我々に。いふ事有とは聞捨ならず。心
をしづめ申せよと。寛仁の計ひに。在所親仁はしづ〳〵と。御階の下にうづくまり。私は山科に住居する。五太夫という
百姓。今ン度是の帝様が大病で御難ン義。夫レを下々等がよう知ッて。あなたには御世継の若子様が根ッからない。もしもの

事の有ッた時。どふしたらよからふと。大勢の公家様（14ウ）方。臍の下から分ン別をしぼり出しても子種はなし。おいらか様な下タ〳〵には。まびきたい程出来る小悴。ア、せう事もない物じやと。こちの村でも是評判。そこで此親仁めが帝様の隠し胤。こつそりと出して来た。サア天子の胤がほしいなら。進ぜませうとにべもなふ。ほつかり突出すあらくれ詞。大納言打驚。何々帝の御胤が何れにかおはしますと。尋るを中将押シとめ。ハ、麁忽也宗岡卿。察する所佞人原に頼まれての偽りな。有り様に白状せよと。気色かはれば娘は立寄リ。コレとゝ様疑ひがかゝつては。却てお身の難義と成ル。事の次第をとつくりと。おつしやりませと気を付クれは。父五太夫横手打。ホンニそう（15オ）じや。おれが気のせく儘に。肝心の事忘れたと又居直り。ヲ、夫レよ。指をくれば六年ン跡内裏の節絵五節の舞姫。俄に一人リ病気が出来。其日に成ッて持ニかへす。時に此娘の軒端。在所育の悴レなれど。上つ方の事ならはせ置。舞でも琴でもござれ〳〵。何が所の神ン主から。伝手を以ッて舞姫のかはりに立ッた器用娘。其夜帝のお寝間へ召サれ。戻つてからの左リ孕。明ル年シの八月に産落トしたコレ此和子。育るに付ケ見るに付ケ。玉の様なけたかい生れ。帝の御胤勿躰なしと終にまだ黒土踏さず。名を付クるも恐れ多く只若〳〵と呼名して。我孫ながら敬ふて祖父よ〳〵といはしやれと教込ンて此年シ月。門ト田（15ウ）へ出さず育た孫様。慥な證拠は娘の軒端。コリヤ今のをいふて聞カしませい。アイとゝ様の咄シの通リ。勿躰なくもお別れに。お哥を書イて下された。其檜扇が印シぞと櫓の中チより取出。

渡せば中将手に取て読下タす三十一ト文字。しのゝめの。袖に露つく若草を。又くる春も手につみてみん。実定はためつすがめつ。誠に是こそ疑ひなき。帝の御哥御宸筆。ハ、〳〵はつと頂戴有ル。大納言指寄ッて。扨は其稚いが若宮にてまして

せしか。御親ン子共若を抱き。御階へとく〳〵上らせ給へ。座を改めんと両卿共其身は遙押シ下カれば。若宮はいたいけに。祖父よあそこへ上らふと。天成備はる優美の詞。抱参らせて五太夫親子。御階を（16オ）さしてしづ〳〵と。浮木の亀の万ン々年ン。上段にこそ。押シ直る。

実定は低頭平身。斯あり難き御胤を御養育有し事。此上の有べきや。若宮は則チ東宮。今は何をか憚らん。帝ははや五日以前ン。あへなく崩御ましませど態包隠したり。只今より若宮を世継キの君となし申せば。祖父君五太夫殿は天子の外戚。御装束を改め給へ。ヤア誰レか有ル東宮女御には別ッ殿ンにて。御装奉れと。声に随ひお局達チ。俄に崇る東宮様。軒端も女御と傳て。御帳の内へ伴ひ入。外戚の御装束数多の公卿持出れば。宗岡諸共奉る今迄。あやしのどてら布子寄代希なる綾錦。光る天窓の撥鬢に。似合ぬ。冠無理やたい。昨日（16ウ）は在所の藁の上。今こそ雲の上ェ人とさしも我慢の眼コざし。其あやしさは狼に。翅のはへしごとく也。

寛然と居直つて。我今よりは帝も同前ン。鹿をさして馬と呼ブ共。誰レか我に背かんや。只今より尊強親王に還俗すゝめ。万乗の位に即帝と仰奉る。此事百官に触しらせよと。聞て恟り紀ノ中将。膝元近カく詰寄て。幼稚の東宮を位にすゝめ。外戚と成て天が下。治るは是順道。仏門に入給ふ尊強親王御位に即んとは。いぶかしき御所存ンと。いわせも果ず怒の顔ン色ヤア愚也実定。我詞を返すは慮外譬帝崩御なく共位をおろし遠島させ。我鬱憤を晴す所存ン。耳をそばだてよつく聞ケ。（17オ）思ひ出すも腹立や。月日久しき昔語リ。我本名は紀の名虎。今の尊強親王は惟高の親王と申。崩御の帝惟仁と。兄弟の位争ひ。角力の勝負に決せんと。惟レ高の御方より名虎すゝみ出。天下わけめの公角力。負たるは運の尽。やみ〳〵

と惟仁を。位に即し其時の。無念ン骨随砕る計リ。夫レより我は。入水と見せ跡をかすめ形チをかへ。山科の土ほぜり五太夫と呼ヒ呼れ。廿余年ンが其間。此鬱憤を晴さんと。様々思慮を廻らす中。幸ィ成ル五節の舞。娘軒端を代リに立テ。惟仁の胤嬢せしは是ぞ天のあたふる所。まさかの時の手がゝりと待チに待たる此年ン月。東宮を押シ立テしも。再び惟高親ン王を帝と仰がん謀。（17ウ）汝其時幼少にて我顔を見しらねど。先キ立ッた儕レが父。紀の望行は我弟。現在血筋の甥として。我に背かば重罪人ン。違背あらば立チ所に蹴殺してくれんづと。今こそ顕はす大悪ク無道。工の程ぞ醜しき。

大納言すゝみ出。名虎公と兼ての術。何ンと言句は有まいがと。力キ身かゝれば紀の中将。ちつ共動ぜず扨こそ〳〵。山科の百姓とは身を略たる曲者と。思ふに違はず我伯父の。名虎殿で有ッたよな。血筋の縁に引カるれば猶以て諫め申ス。かゝる逆意を止給ひ。本心ンに帰られよ。いはせもあへずはつたと睨。此名虎が命ィに背く器量なしの賢人ン顔。打殺すやつなれど甥がいに命は助け。只今より官位を剥思ひ（18オ）しれと笏取のべ。冠はたと打落し。階より広庭へ。立蹴にどふと蹴落して。猶も怒の声あらゝげ。ヤア〳〵者共実定を引立。奴天窓に剃こぼち。下部にして責つかへと。罵る声に侍ィ共。走リ出て追立れば。中将無念ンの歯をかめど。後日の大事爰成ぞと。態そらさぬとぼけ顔。金ン玉の名ィ言ンも。耳にさかへば石にもおとる。我冠を打落され早中将は世になき者。則チ今より実定の。文字の冠リも打落し。貫之と名乗ルべしと独笑して立上れば。

大納言ゑせ笑ひ。かゝる場所にて悠々と。名がへの講訳聞たくない。うろたへて血迷ふたか。名虎公の御目通リ。早立去レと宗岡が。下知に随ひ追立る。道に背かぬ。辱め。追付思ひ（18ウ）しらせんと心の恨紀の貫之。中門ンさして。出て行。

奥御殿ンの御簾巻キ上ケ。惟高親ン王上段の褥に座し。名虎の謀計大納言の智略にて此惟高今ン日より四海の主ジと叡感に。両卿ハツト頭を下ケ御代万ン歳と祝しける。

名虎弥勝ッに乗リ。心がゝりの実定め先ッ一人ンは片付ケたが。奥に居る僧正遍照。殊勝らしく見ゆれ共油断のならぬゑせ坊主。此所へ呼出し心底を探見ん。ハレ宗岡引ッ立来られよ。畏つたと大納言立上る奥の方。僧正遍照。名虎公に改メて御目見へ仕ると。朱の衣を引キかへて大紋立派に立チゑぼし。遙下カつて両手をつき。只今此体たらく定メて御不審こそあらん。今更申に及ばねど。我レ世に有し時の（19オ）名は良峯の宗貞。出ッ家して遍照と世の外に身を隠すも。恐レながら名虎公に少シも違はぬ族。片端に討取て。宸禁を安んじ奉らん。出ッ家を捨しは二心ンなき宗貞が血ッ判と階下に拝を。なしければ。

ホゝ公家も奴にする名虎。自身に形リをかへてきたは遁は老功よい了簡ン。今一人ン気ぶさいなは仁義立する菅原の是善。先キ達ッて呼寄スれど病気と偽り参内せず。彼レが娘桂姫惟高親ン王に御官仕へを申付。違背せば即時に絶命還俗の手始メに。やはらかな女の使宗貞に云付る。アゝ畏り奉る菅原家は文章の職。（19ウ）一チ物有是善が胸中。一応も再応も急度正して御味方申させん。叡慮安く思さるへし。早退出と領掌に惟高親王悦ッ喜の眉。随ふ名虎大納言世は様々に宗貞と名乗ルも輪廻破戒の相。邪鬼の大紋罪科の。重きゑぼしをふりはへて奥とへ表テへ別れける。

其日も西に傾ど傾かぬ名を菅原の譜代。白井太郎武任は主君の名代使者の役目。広庭に入来る。

御階の前に声はり上。禁庭の評義に付キ。是善を召サるれど。主人未病気治せず。此武任に何事も仰付ケられ下されと高ら

かに呼はれば。廊下の板間 轟 し玄ン番に下知して強気の名虎。ゆるぎ出て大音ン声。ヤア是善が家来の蚊とんぼ侍ィは儕レよな。我（20オ）呼付クるに名代を立ッる不届者。早く帰つて是善を是へ引ッ立来れ。儕レごときが御殿ン近カく穢はしい。そこ立去レと睨付る。ハ、御上意は去ル事なれど。病中の主人輿車の参ン内禁中の憚りを存ジ。名代の御 断 。却て上を慎む是善。不届キとのお咎は恐れながらと云せも立ずヤア詞を返す慮外やつ。腰膝立ずば戸板に乗ッてもなぜ参らぬ。当帝の外戚大政大臣たる紀の名虎に背くは朝敵。大罰しらずの是善が見せしめ。うぬから先キへ鷲ざきにしてくれんづと。掴付カんず其勢ひ。短気の武任ぐつとせき上ケ。主人ン是善は代々の公卿天子の御師範。御召シ有ルにも夫レ々の礼義有。ハ、、御存ジないも尤。たつた今承はつた在所親仁の成リ上り。ふてくろしい（20ウ）外戚呼はり。鷲さぎにせられぬ中チ。天罰が有かないか武任が試と。手早く打込ム小柄の手裏剣。名虎が弓ン手へはつしと立ッ。すかさず抜キ取リ打返せば。宙でまつかせ武任が握り取ッたる一拳元トへ納る小柄の手柄。ヤア我に敵対法外野郎。玄番早く搦捕と云捨御殿へ入ル名虎。玄番は心得手捕リにせんと。付ケ込ム腕先キまつかせと。太郎すかさず受ケ留メて。向ふあゆみにつか〳〵〳〵引戻して頭轉倒。もんどり打せば侍ィ共。てん手に得物 提 て。無二無三につつかくる。請ケつ流しつ手練の働。逃ケ込組子遁さじと大庭さして。三重へ追ィめぐる。

玄番を始メ侍共鯨に追ハれし一むれ鰯門ン外さして逃出る。先キへすつくと白井太郎（21オ）関に成て二王立ト。ねぐさつたうぬらが命。片付ケてくれんづと。聞より玄番が切込ム切先キ。心得柄元トしつかと取ル。儕レが刀で成仏と。もぎ取いなや稲妻の。光りの下に玄番が最期只一ト刀に死てげり。残るやつばら追ッ詰〳〵こな微塵あたりに近カ寄ル者もなく。

地色ハル
ふり返つて大音上。名虎を始メ宗岡共討取リは安けれど。官位といひ二つには。主人を憚り助ケて帰る。追ッ付ケ思ひしらせんと。御殿にひゞく力ラ足。爰も大内山彦や獅子の。荒たるおどろ髪。振リ乱したる大わらは。白井が義心底深く漲る勇力キ尽ぬ代の。ためしに引ク弓取ルの。其名雲井になりわたるほまれの。程こそゆゝしけれ（21ウ）

道行内外の私言　第二

照日の神も。女神にて。殿持タぬ身のひとりねを身にしる雨や菅原の。月の笑顔のかつら姫舎人の助をなつかしみ。跡をあふせの初ッ旅路。よしやかゝりし身ならずば今はた内外の神詣。青柳しほり御供し。揃ふ姿の花染浴衣。小づまかいどりしやな〳〵と。しづの目立タぬ。ふりにしも。つくるほど猶見まさりて色も。ますげの笠と杖。つく鐘の声鳥の音も。早打しきりしのゝめに明ケて。あはづの朝ぎりも。嵐によはる草津の宿ちよろ〳〵。小（22オ）川立よりて。清きをすくひみな口をすゝぐ。手もたゆ足引キの山道。野道。はてしなく。都を出て。六夜七夜。やよこゝの夜やとよくのゝ。松の紫色はかはらねど。かはり久保田の村烏。かはひ〳〵の声聞ケば。心がゝりの長なはて。ゆんでもめても若草の。しげり寝なゝんむつごとを松坂こへて。急げ〳〵と恋風がつとの梅花を。吹ちらしおぐしけづるか櫛田川。ふかいおてきの手を引てはでな参りの一群は。扨も見ごとなおつゞら馬を引イた馬士衆のなりもよや。色と情をないまぜ手網。腰に馬びしやく手にや又くつわしやんとのり人もよい通しかご。おゝさきるさに行違ふ。田舎道者や（22ウ）ぬけ参り老も若きもあだ口〳〵に小哥上るりだてらしきぬめの。ほうしの小びくにが。わしはこふした。丸太船。いやな嵐をひらきにうけて。ほの字顔するうきつとめ。あたしんきなと口くせに。どふで恋路の身をつくしヱ。通ひ〳〵て。又戻り。はなれ〴〵のむら雲見れば。あすの

別れが思はれて。あたしんきと口くせに。あはぬむかしがましじやものヱ。哥のしやうがよ自も。同し世をだに忍草忘れ草なきいもとせのいとしとのこに添れぬは。どの神様のとがめそと。かこち給へば青柳しほり。いさめなぐさめ漸〳〵と今宮へ川を渡会の。宮居尊く伏拝み心のしめを榊葉にかけし（23オ）願ひは恋人と。中もかたかれ岩戸のやみもはれてさやけき上へ月よみ日よみ。末社〳〵をのこりなく。めぐりあひたや相ィの山。お杉お玉が引ク三味せんの。いとしらしさに一期はおろか。二世も三世もきれまいと。袖やたもとに取リ付ィて。島さん紺さん中のりさんお江戸さんはち巻さん。これ〳〵そちらのじうりんさんやてかんせ〳〵。やれふれしつかとふつたりなでんちうじやはりひぢじや。拍子揃へてするさゝら。竹の直なる。神心恵ミもあらばうき事を。祓給へと主従が三つの。かしはのうらかたもよしといはひていそ〳〵といちの。鳥居に着給ふ。（23ウ）

青柳しほりかいしよげに姫を労はり傅て。舎人様に廻クり合ふぎゑん祝ふて宮廻り。サア〳〵お出と杖と笠。常の参りに打紛れ。通れば末社の官宦が。お白石〳〵。扨ても見事な極上代ロ物。衣通姫の御神かぼつとりすふわり。今迄誰が只沖津彦の竈神。我等も臍にお茶が涌。お賽銭受ケいでも。お宮の案内此百大夫。イヤ〳〵おれが千大夫。ヱ、おいてくれ沖津姫さんサア。〳〵。こちへと世話やき自慢。せんを取ラれて宮雀。ふくら雀の腰つきを無理にしやな〳〵端手女中。中カに交りて舎人之助当世風の色好。役目幸宮廻クりもよい女房見る下タ心。先キに叩首風俗はむつちりと能ィ肉合とちよつと抓れば。ヲ、（24オ）すかん。誰レさんじやとふりむく顔は南無三宝からくり的のくはせ物。ホ、〳〵〳〵。あのお方とした事が。殿御の癖の浮気でなくば。こちやどうなりとする気じやと。抓りがへしてじつと見る。したゝる目元トにきいやりと。

一生の麁忽早まりしと後悔先キに官宦が。此御神は商神〳〵。何に寄ラす取リ込ミ吸ィ込ム万ン福六腹去リとはきついゐか物喰。此女中の神ン躰は。大己貴の尊でござると。御幣打テふり千早振。人ト目遠慮もしなだれて。お前といつしよの宮廻ク り縁ンの深カさと手を引ケば。おたふくの神土の神。先キへ歩むは桂姫。案内の祢宜が猿田彦の鼻いからして 妫 の。腰付キふつつり。ヱ、なんじやのと見返る跡に。ヤアあれ〳〵舎人様（24ウ）が見へますはいな。ヤヲ、ほんにそうじやはいのそふじや〳〵とそゞろ足。ヲ、イ〳〵に心付キ走るを。留る山の神惚神付ィて。付キまとひ。跡へは戻さぬ寸ン善尺魔。雨の神風の宮。中に邪魔して吹キ分ク る土風恋風もたわい。やく体漸と。本ン社の辺りに走り付キ。舎人之助様桂殿ア、嬉しやと取リ縋り。恋し床カしをため〳〵の息キつぎあへずひつたりと。抱キ合ッたるわりなさを。連レの女は見てうつかり。月夜に釜の抜ケ参り。ヱ、こりや何のこつちや。コレイナ〳〵これ男さんそれや門ト違ひじや有ふがの。最前からわしがお尻を。お前に任して。置ィた物。いきせいはつて宝引の。大事のふぐりを取ラれてのけた。ア、〳〵儘よ。黄な粉も小豆も餅は餅。コレ称宜殿。わしや（25オ）今からこなさんを。いとしぼがろと抱付ケば。あら勿体なや清め給へはらひ給へ。どれ程餲て居れば沖。饅頭の代にぼた餅はいけぬ。物じやとかけ出すを逃カしはせじと。追ッて行。

傍見廻し舎人之助。大事の親御有ル身を以て。桂殿がござれば沖二人の者が留る筈。某は大事の役目相役の河成殿追ッ付ケ爰へ見へる筈見付ケられては互ィの越度早々都へ帰られよと。わざと難面云ィ放すを。聞クに物うき桂姫。イヱ〳〵〳〵ついした事で来や致さぬ。大納言宗岡殿わたしを親王様とやらの宮営の后のとそれがいやさの抜ケ参り。しらぬ旅路を遙々と跡を慕ふて来た物を。たつた一ト言可愛とお詞が。有ッた沖お前に罰も当るまい。爰から直クに何国へもお前に付ィ

て（25ウ）行ク心。そも浅ましい下〳〵の。しんきしん苦もいとやせぬ。館へ帰れとおつしやると。覚悟極ておりますと。離がたなく見へにける。

ヲ、そふじや〳〵桂様そつこん女夫におなりなされ。とは誰人ぞと立ヂ退ば。イヤ苦しうない当所の御師。渡会大夫春彦と申ス者。姫の御母久方御前は。伊勢の祭主長官の御娘。其縁に寄ッて拙者が母はお前の乳母。乳兄弟の此春彦。大恩有ルお家の息女。思ひ詰た此恋中。拙者が妹御夫婦に致ます。爰は先ッお帰りなされ。お前の身はいとはぬ気でも。浮キ名が立テは舎人様の身の難義。おいとしいが定なれば。適にくひ所をいぬるのが殿御思ひ。ナア左様じやござりませぬか。コレサ二人リの妙（26オ）達チ倶々お進め申しやいのと。湛納させる人あしらひ。伊勢の大夫の得物也。

姫も遺に打につこり。そんなら館へ逝だらは。必女夫に成様に。ハテ神職が嘘。突てよい物か。すへ長コふ添ふ気なから一時も早ふ〳〵。まだどふやら不足な顔。ア、夫レもお道理。折角恋路の伊勢参り。逆鉾の味も見ず。蚫の貝の片参宮。マア外官迄おさがりあれ。様子に依て舎人様も跡からこつそり。そんなら宜しう頼みます。どふぞ首尾して春彦様。合点〳〵。天の岩戸の忍びの段。両人ン計ひ候へと。乗セる大夫が大々神楽いさめへすかして別カれ行。

跡見送つて舎人之助。春彦に打チ向ひ。存ンも寄ラぬ御深切面目もなき仕合セ（26ウ）と一チ礼聞ィて。是ハ〳〵御挨拶御互に沙汰は是切。扨今ン朝久方御前より内々の書状早打にて到着。是御覧ぜと差出せば。手に取ッて押シひらき。読も終らずはつと計リ。扨テは都に紀の名虎惟高親王を進め。謀叛の色を顕はせしな。我レ都を立チし節拾ひ取リし河成が書状。貴殿にもお目にかけた。彼是以て片時も爰に猶予ならず。是より直にと立チ上る。ア、おせきなされな。何はともあれ今日のお役

目。殊に彼河成は宗岡名虎に一ヂ味と見へたり。何事も御存ンない顔。役目の時刻も近ヵ付ケばいさ御用意と立ヂ上り。聞へはゞかる胸と胸云ず語らず打連レて。宮居の方へ行跡に。

けふの役義（27オ）の横目として大納言の身内百済の河成。旅宿の宮官百太夫打連レ立ッて歩み寄リ。傍見廻し小声になり。此度ヒ帝御脳に付キ神庫へ納る錦の御簇。持ヂ来タりしは舎人之助。納る役は渡会春彦。此河成は見ン分ン役。兼て汝に言ィ含めた彼御簇を。コリヤかう。〳〵と差寄ッて。何かはしらず奥に口。六根清き神の前。心の内に諸々の悪ル工とぞしられける。

小点頭して百大夫。へゝ祢宜仲カ間でも口を利。崇はしひ此百大夫お気遣ヒなされますな。今ン朝其舎人之助が。末社参りの其跡から追ッかけた都女郎。彼お咄シの菅ン家の娘。桂姫に違ひない急度見付ケて置キましたと。聞ィて河成したり〳〵。身共が思ひ（27ウ）しらしてくれふ。コリヤ〳〵最早役目なれば河成是にひかへおると。ソレ舎人之助へ案ン内致せ。早ふ〳〵に百大夫。畏つて瑞籬の内へ急けば河成も。衣紋繕ひ歩寄リ。こなたに義式の御注連縄栗石蒔し其上に。清めの荒菰敷キ渡す。上座の方へ遠慮なく。荒々敷も押シ直る。

御殿の方タより立ヂ出る良峯舎人之助永久。上下立派に衣服を改め。錦の御簇入リし箱恭〳〵敷ク手に捧。續て社人渡会春彦。神ン事の装束白幣さもおごそかに取リ持ッて。数多の宮宦付キ随ひ清浄の座に居並びて。

見ン分ンの御ン役目。河成殿御苦労に存ると。両人ンの挨拶に。是は〳〵。（28オ）拙者は誠に副役ク目御番所は別して御苦労。殊に天気快晴にて悦ばしう存ンます。河成殿の仰の通。何か万ン端都合宜敷。此舎人之助も身に余る大慶に存ンます。則チ

只今御簇を改め。春彦殿へ御渡シ申スと。御箱の蓋を取ラんとする。其手を押へてイヤ舎人殿。河成申に及ばねど大切な此御簇。清浄な上にも猶清めねばならぬ事。貴殿謹に麁末はないか。お客故に気を付ケると。針有ル詞に舎人之助。むつとせしが押シしづめ。是は〳〵河成殿の仰共覚へぬ事。大切の此役目神家同前の物忌お気遣イ御無用と。云ヒも切ラせずハ、〳〵〳〵イヤサ是。此河成当のない事は申さぬ。今日噂に承はれば。都是善卿の息女桂（28ウ）姫。貴殿の跡をしたふて来て。方々と尋られた。サア尋られたといふ取沙汰。兼て貴殿は桂姫としたしみ有ル中なれば。若左様の不埒な事此場で有ッては大不浄。何ンとそふては有ルまいかと。押て乗リ出す横車轟胸は舎人之助。そらさぬ顔に。イヤ是何河成殿。そりや何事を申さるゝ。此方決て桂姫と密通の覚はないぞ。覚へなければ此所で勿論逢ふ様もない。麁忽の詞申されなと。膝立テ直せば河成も。にじり寄ッて罵り声。我レに向ひ切ッ刃廻し憤る顔色は。星をさられた腹立か。姫と密通せぬといふ慥な證拠でも有ルか。サア返ン答は有ルまいかと。詰寄ル河成こなたも身がまへ。春彦隔て声はげまし。今大切ッの御簇（29オ）納め。わたくしの諍によつて遅滞致さば一ッ大事。永久殿が桂姫と密通でないといふに。是ぞといふ證拠もない筈。又河成殿には姫君と密通に極つた。慥な證拠がサこざるかな。ア、イヤサ。それは。ホ、畢竟当座のわさくれ言。よもや證拠はござるまい。御簇納め遅滞の事。禁庭へ訴へなば御両所共忽に。お身の上てござらふがと。一句に詰られ。アイヤ〳〵全く跡此河成。義式を大事に思ふから。コレサコレ舎人之助殿私の論は無益。早々御簇を渡されよと俄にかはる負惜み憎しと。思へど永久も。役目大事と御簇の箱。蓋押シ明ケて錦の袋改めて箱に納め。春彦殿奉納有レと。箱差置ば渡会は当座の不浄（29ウ）すゞしめの。口に神呪の唱へ言。清めの幣に打ッ払ひ。御簇を携へ立上カり。御両所共イサ御出と礼

儀正しく河成舎人。遺恨をかくす辞冥作法。日も暮レ渡る天津空御蔵をさしてぞ。神ミ風や。さもしん〳〵と音楽の。八ッの物の音。谺して木の間の道より灯ともしの。祢宜の役目もそれ〳〵に。神ン前見廻ハり神ン燈を。かゝげて猶も尊とさの何かしらはり後ろの方。走ル人ト音身を隠し。窺ふ所へ百大夫御の簇奪取立出る。跡を慕ふて春彦がさし足ぬき足燈寵の。灯かげに透し盗賊め。やらじと箱に片手をかけ。儕コリヤ河成に頼れての所為よな。そこ放せよと引キ戻せば。こなたも箱をしつかと力み。ヲ、サ〳〵（30オ）よい推量。ならば手がらに取リ戻せと。こなたへ引ばあなたへ引キ行キつ戻りついどみ合ふ。後の方より件の灯ともし。走出て両人が諍ふ箱の真ン中を。しつかと取ッて双方の。腕放さんと我カ身をしづみ。乗ッか、つて三人がくるり。くる〳〵車の輪。かなへの足と踏しめ〳〵。透を伺ひ灯ともしが臂の当身に百大夫。うんと悶絶春彦も。蟄居にすればまつかせと箱引たくりかけ出すを。起キ上つて後さま掴んだ烏帽子はすつぽりとぬげて。遁るゝくたんの祢宜。遁さしものと春彦は跡を。したふて。三重へ行道の。

おめしかる事も梨子地の文箱にて。使ィは被如月や。大内山の春霞龍田吉野も及びなき。築地もれくる梅が香は。西隣こそ（30ウ）興有ラん。お伊勢参りに御報謝。是よい着物きた女子様。此お内裏様のお名は何と申シますぞや。ヲ、田舎からお伊勢様へ。抜ケ参りした子供か。此御所は管原の是善卿。ヤレ嬉しや。コリヤやい。宇治橋のこちらで名ィ物の赤ほこ買て下さつた。お娘様は爰じやとやい。戻りに古市とやらの芝居やでな。でこを見せて下さつた。ヲ、そふじや。おいらは出雲松江の者。十三がいつち兄で同行二人。一ト人リは愛宕様で。しんどふさにしんこ喰て道に後れてふたりの道者。京へ来たらば。菅原とやら菅簑とやら言しやつた故。大方畳やか。簑やかと思ふたれば。結構な家に居さしやますお娘様。

出雲の者が寄リましたといふ（31オ）て下さんせ。おれ共が国の大社様へ参らしやましたら寄ラしやんせ。ヲヽ成ル程此御所よりお姫さま。御参ン宮遊ばし此比お下向。それならばそち達チに。京へ来たらは必よれとおつしやつてお約束遊ばしたか。お姫さまのお傍迄。わしが連レていてやらふと。いふに悦び笠の紐。徳よ抜ケ参りのぬけ殻の。其ござもそこに置ケ。ひよつとはぐれた捨松が。笠を見付ケて来ふも知レぬぞよ。何のいやい。伏見へ行たら逢ふわいやい。其飯柳骨もそこに置ケ。ヲヽそれ〳〵むさい物はそこにおきや。サアこちおじやと夕づく日連レて御所へぞ入リ相イはまだ半ン時も在原の。健な男は築地の崩れ。是は築地に見越の梅風に四五輪ばら〳〵（31ウ）と。ふつて涌たる身の災難。良峯舎人之助永久。御奉納の錦の御旗人知レず奪取ラれ。伊勢路より直様にかへる詮義の手がゝりも。雲を当どの比叡颪。余寒烈しく吹ク風を防も。あいの綿帽子夕顔ならで紅梅の。五条わたりに軒高き。

菅原の築地の影行キつ戻りつ佇て。誰そ出よかし通伝有ラば舎人が来たとしらせんにと。門ンの中を窺へど折リ節人も中カ庭の。中門ンに脱置たる。ぬけ参りの笠とござ。人めを忍ぶ究竟の。隠れ簑笠引かぶり。我も追付ケ世に出雲松江とは吉事を待ッ。人を待ッ間にぬつと出る。奴コが見付ケて。コリヤ何者。フウ扨は今来たぬけ参りに。道ではぐれた連レの道（32オ）者。二人リながらお姫さまのお傍へ往て。性にも合ハぬ味い物を喰ふ程に〳〵。虎屋の羊巻饅頭を。咽をならして喰イおるが。身もこのもしさに咽計をならして来た。せめてあいらが冥加の為。劔向か青のりをさし上ればよひけれど。雲綢縁の畳の上へ五郎ざを百疋程あいつらが置キ土産。何が長ガの道中を拶ふつて。生か木計噛だ道者。腹ぶくろが鞠れうぞ。われも爰に待ッて居よ。来た事を申上ケて生れて喰ぬ物くはそと。引かへす気の長カ袖は。奴コ等さ迄ニ情しり。

しらせにお婢お妘勝ッ手口より走出。ヲヽはぐれた同行か。吾儕の事をおつしやつてお姫さまもお待チ兼。早ふ〳〵に。イヤおれじや。アレ聞カんせ（32ウ）慮外な道者。ほんになめた伊勢参りと。笠を覗て。ヤア舎人之助様。どれ〳〵ほんにコリヤかをれ。変つたお姿。サアわしや抜ケ参りの連レかと思ひ慮外は御赦されませへ。お前の事を苦に遊ばし。くよ〳〵案じてござるのに。桂様におしらせ申そ。やつぱり此お姿て必爰に。ござ引きせ二人リは走リ入相の。おぼろに見ゆる人影ケを。恋しき人と走リ寄リ。舎人様か。桂殿。逢イたかつたと抱合。泣クより外カは中戸口。人もくるかと諸共に延上り〳〵。剛いやら可愛やらマア何からいはふやら。伊勢で別カれた其後は。風の便リにお身の上ヱ。聞イていくせの。物思ひ。折角参つて拝んだに。お伊勢様さへ聞コへませぬ。よふ顔見せてとさし覗き。（33オ）縁をぬふてふ笠の中梅の花笠道者笠。菅も赤らむ。恋初め。

舎人之助声を嚬め。互イに逢フて程なけれど無事な顔見る嬉しさも。悲しみになる舎人が難義。内イ宮にて御奉納の錦の御簇人しれず奪取ラれ。即座に其場で切ッ腹と思ひしが。神ン前を穢すといひ。再び御簇取リかへし武士の恥辱を雪んと。伊勢より直クに都に帰れど。禁庭へは参ン内ならず父の遍照僧正には。猶もつて対面叶はず。爰に隠れかしこに忍ひ若手がゝりも有ラんかと。人目を忍びて都を徘徊。サア其事も下々の。噂で聞イてもさだかならず。聞ク程お前の一チ大事。どうぞ思案を倶々に。外カにお（33ウ）咄し申ス事。有リ明月のお入リ迄。お日待チの御音楽幸イなれば此一夜。千代のかためを舎人様やいの〳〵とひたすらに。放れがたなき風情也。

折から奥にめのわらはお妘桂さま〳〵。娘よ姫よと母上ヱの声に驚き舎人之助。何国に忍ばん隠れもなく。又引かぶる笠

と莞筵梅の木影に忍びゐる。

母の久方立出給ひ。ヲ、桂そこに居やるか。妙共に尋たれば梅の哥を詠じて。お書キなされてござると云故。紅梅殿を尋ても居やらぬは道理。端近へ出てそこに何して居やるのじや。アイ爰に先キ程の伊勢参リ。自も伊勢道中見物した名所古跡。面白さに尋ております。殊に千ン度万ン度の祓。受ケて貰を（34オ）と思ふてと。間に合イ嘘も真赤な振の紅裏しどけなし。ヲ、夫レは奇特な。したが伊勢参りも一チ度や二度は見遁しに赦しもせふが。千ン度万ン度は浮名が立ッて。父のお顔も捨タる事。しるまひと思やらふが立居そぶりて何事も。此母はよふ知ッてゐる。コリヤそこに居ル参ン宮人。出雲の道者といへば菅原の御先ン祖の生国。夫レで一トしほ外カ人の様に思はれぬ。夫レも姫が可愛さ故。御先ン祖野見の宿禰と云フは天下に隠れなき。大和の国当麻の蹶速と云フ大力キに勝ッて誉れを顕はし。夫レが相撲の始めじやげな。夫レより天子の御崩御には殉死迚の追イ腹。其事を土人ン形で拵へ殉死を止たる御恩賞に土師の苗字（34ウ）を給はる。コリヤぬけ参りよふ聞ケよ。公家武家に限らず人たる者は。土師の名字を思はねば武士交はりがならぬぞよ。伊勢で取ラれたそちが着がへ。何とぞ再び取リかへし元トの武士に立チ返つて。表テ向から千代も替らぬ土器で。酒カ迎ひの盃キせぬぞ。此久方が胸の中チ。明ケて岩戸の神隠れ。まさかの時は父君が。伊勢参りの手ちがらをにもおなりなされふとくゝめる様にゆふしでの。伊勢になぞらへ姫舎人に。異見もかはゆき智娘。ほに顕はれる母の慈悲。二人リは顔を上ケもせず返す。詞も泣ク計リ。必〻々不義徒が知レた迚。短気な心持ッまいぞ。とかく命が物種。殊に姫は兼てより入内の噂聞キ及ぶ。入（35オ）内さそふがさすまいが親々の心次第。好イた事なら何ンとせう。若もいつしよに寄ルならば。産て手いたい事をせぬ御所育。不便ンがつて

下されと。目には涙を持チながら。泣も泣れぬ母上の。慈悲と情と恩愛に。二人は声も上やらず有リ難。涙果なき。心を思ひやり戸口。奏者役罷リ出。名虎公より勅使として良峯の宗貞御出也と申上れば。妼共は其通父上へ申上ケよ。姫はこつちへ伊勢道者は。勅使に顔を見られぬ様に。中門ンより立チ帰れと。つど〳〵に心を付ケ。帰る舎人に桂姫。名残おしげにふり返り。見返り見返る其中チに。早入リ来タる父遍照。行キも得やらず白砂に。体を梅の花隠れ見ても。見ぬふり納る宗貞。（35ウ）武士の表テを立鳥帽子。館の主シ是善卿。しつ〳〵と出向ひ。勅使御苦労候と。席をさがつて招請有レは。宗ネ貞上座にむづと座し。比度紀の大臣ン名虎公多年ンの本ン懐一ッ時に達し。惟高親王を一。天万乗の位に立。威勢四海に鳴リ響き誰レか是を知ラさらん。然るに是善病気と名付て引籠り。今に置イて参ン内せぬ胸中いぶかし。名虎公に同心ンか。但不得心成ルや。心ン底に寄ッて計ふへき子細有リとの厳命。一ト口の御返ン答承はらんと。述にける。

地色ウ 是善強く気色もなく。還俗して良峯の宗貞といふ武士なれ共。遉昔の出家気質もきどうなる使者の口上。委細承知去リながら。今名虎（36オ）公天かしたを掌握有レは則チ天子も同然。同心ンか不承知かとは今めかしき御尋。参内せぬは病気の怠り。譬何国に隠れ住ム共。日本の中チは天子の地下知に洩る者有ラんや。是善野心有ルならば。力キ者に仰て細首を召サれんに何の子細。聊違背の所存なし。此旨帰つて奏問有レと事も。なげ成。あしらひに。ホヽ一ト通リは聞コへたが。勅諚を背ぬとは云れまい。貴殿ンの娘桂姫美人の聞コへ有によつて。惟高親王見ぬ恋にこがれ給ふ。御宮仕へに差上ケよと再三のお使イ。一ッ天の君の威勢日本ン国の美女ョといふ美女。かり集る共心任ヵせ。其中チに撰出さるゝは其身の果報若若宮でも生ミし時は貴殿の（36ウ）家の繁昌。目に見へた幸を。有無の返答遅なはるは。名虎公の御下地が気にくはぬか。是で

も勅諚背かぬか。サ何と〳〵と詰かくる。ハ、、、、何事かと思ひしに。ふつゝかなる娘桂。左程迄懇望有レは有難しと申シたいが。惣じて天子の后定めは。媚形チに寄ラずして夫レ々の家柄に寄ル。后と申は摂政関白の家に限る。其外カは皆お局妾云はゞ当座の戯れ者。俗に云フ遊君浮れ女も同然。娘を御宮仕へに出しそれを功に官禄を貪る。是善とのお見立テならば祝着に存ンぜぬ。某を御召シ有ルは我カ器量を御懇望か。又娘が器量を御懇望か。紛らはしきお使イに御返ン答は得申さぬと。空うそふいておはします。ム、遉の是善尤の一チ言ン。弁舌工ミに云イ廻しても娘の不義は隠されまい。（37オ）何娘に不義有とは何を證拠。イヤあらがはれな。誠違勅の心でなくば。桂姫と不義の男両人ン共に引キ出し。首討て差上られよ。さなくば御辺の身の上ならんと面ン色かはつてせりかくれば。

久方御前は只ハア〳〵何ンと柴垣舎人之助。もふ是迄と覚悟の体。是善目早く。ヤイ〳〵狠狽者。宗貞殿お聞キなされ。梅に巣をくふ鶯の燈火の影に驚ひて。時もこぬに音を出し。我と名乗ル空気鳥。子で子にならぬ郭公。冥土の鳥はまだ早い。鳶鴉に取ラれぬ中チ早飛去レと知ラせの詞。ホ、其小鳥宗貞が塒を見んと立チ上る。ア、是々きのふけふ迄出家の境界云ハれざる殺生戒。惟高親王御心をかけられし（37ウ）女。随はずば我カ娘を首討て出すぶん。若不義の男出たらは一ッ天の御主シ思ひ者を匹夫下郎に盗まれし君の恥を触あるく。天子の恥は天下にかゝる。比義に心付カざるか麁忽也宗貞殿と。道理を責し仁心に。思はずよはる皺面涙。躬有レ共なきがことき。不義不所存の性根故。一ッ旦ン仏ケに誓ひを立テ忍辱慈悲の僧形を。還俗して良峯の家を立テるも武士の作法。少シ成リ共見ならはゞ帰参さする時節もやと。恩愛の闇に心迄大俗と成ッたはやい。情ケ有ル是善の館見遁すは他人ンだけ。目にかゝらぬ中チ何国へも。立てうせふとあらけなき詞は慈悲の裏

門ン口。顔も得上ず舎人之助。しほ〳〵（38オ）別れ出て行。

是善心を察しやり。弓矢打チ物脇狭。敵に向ふは武士の形チ目に見へぬ鬼神も。取リ牲は親子の愛。和ぐ国の和哥の徳。名虎公に治りし御代万歳を祈の為。太平楽に准へて。今宵初春の月に向カひ。音楽を天に奏せんと兼て楽人ンを召シ寄セ置ク。御返ン答申ス間手は廻らねど琴の一ッ曲。物ごしにお聞キ下されよ。久方奥へ御案ン内暫しが間と爪琴に。事をのばして奥方に連てへ一間に入リにける。

是善卿は兼てより御斎の燕居の間に。天地四方を。再拝し。手向の音ン楽音も澄て。神に心を築紫琴。何れの緒より。調そめけん松の風。木の間に誘ふ春の月。朦朧たる其中チに。怪しや（38ウ）化たる女ナ姿戴く。天冠。玉の笄。玉よりも猶止事なき天童を。雲の袂にかき抱キ。忽然と庭に。佇り。

是善琴の音をとゞめ。其昔清見原の天皇の吉野の内裏に御身の祈。奏し給ひし琴の音に。天女天降て舞奏。今是善が拙き曲。感応有べき様なけれど。此世の人共思はれず。そも何国より洩来る姿。不審し不思議さよと。忙然としておはすれば。ヤヨ此界のもふち君。御身誠の心を感じ。忉利天より天降天津乙女の此姿。菅原の家に男ン子なき事を悲しみ。此天童を下界に下し御身が世継に授るぞや。霓裳羽衣の音楽に天の羽衣千ン年に。一度と来る天ン女の形。最早雲井に立帰る。

（39オ）天上の栄花共凡夫の眼には羨め共。天人の五衰の苦しみ。幾度か落る涙は雨と成リ。露とそゝぎて絶難是此界の名残リぞと。童子を下に置キ別れ立去ラんとする所を。ヤレ暫く待チ給へ。天より我レに給はる天童。手づから授給はるへし。いざと。請ずる奥の亭。童子を抱梅薫。細殿伝ひ。やり通し猫丸の太刀抜キ打に。ひらりとかはし待ッた〳〵。聊尓せ

まひ。シヤ事おかし必定狐妖怪の類。我レを欺く其天童。只一ト討チとふり上る刃の下に童子の顔。思はずきつと天性の優美の姿に刃もなまり。猶予中チに差出す一巻。ヤア是は是天子代々譲りの譜。サア是を所持する此稚子。天童と申ス（39ウ）が偽りか。扨は正しく一天の。御胤にて有リけるかハ、、、はつとしさつて。拝し申さるれば。

天女はら〳〵涙にくれ。

御裳川の御胤を受ケ継給ふ御果報の。いみしさには引キかへて。わらはが腹をかり給ふが此お子の身の不運。なま中氏も素性もなき。賤の女ならば科カも有まい。有が中カにも情なや。逆臣紀の名虎が娘。豊の明りの五節の夜舞姫の中に交はりて。大内へ入リ込ミしに。有リ難くも帝様の御情を蒙りしが。父上の悪ク心の始。身に腰したる此お子故。外戚の威を功に。禁中を乱す我カ儘無道。人の恨ミは皆此君の身にかゝる。わらはがつらさ悲しさを思ひ廻せば勿体ながら。因果なお胤を身に持ッて。此儘置カは朝（40オ）敵の名虎故に。若宮迄悪ク名を受ケ給ひ。いか成ル刃の災にも合せ給はん浅ましさ。密に内裏を抜ケ出て。迚も御果報拙き御ン方。雲井の交はり成リがたし。道を守菅原の。是善卿の御子とせば御身の行末。御難もまぬがれましまさんと。伴ひ申ス自が力ラと思ふは御身計リ守立テてたべ是善卿。五節の舞の此装束。取リも直さず天人ンの。五衰三熱の苦しみより。わらはが胸の苦しさを推量有レと計リにて。涙血を叶紅梅の丹花の唇羽衣に凌ぐ方なき。雨やさめ。感涙催し是善卿。今日の只今迄。病気と偽り引キ籠有リといへ共。忠臣ンは智らぬ是善。紀の貫之と心を合せ。今上皇（40ウ）帝は御脳によつて崩御也と云ィふらし。人トしれぬ方に御安体に渡らせ給ふ。此子は正しく若の御胤とは云ィながら。子は母によつて尊しといへり。外の縁賤しければ。十善の君にはそなへられず恐れながら。菅原の

家に守育菅三殿と。名付ケ申シ。公卿大臣の高官となし参らせんさりながら。我カ子といふも勿体なし。天子に父母なし父もなく母もなく。梅の木の本トに降誕有リしと。末の世迄も伝ふべしと。敬ひかしづく菅家の孳。天満神の御出生因縁かくとしられける。

ハア忝や嬉しやな。此上は思ひ置事なし。よしなき母が有ル故。に却て和子の肩身もすぼる。敵キの縁ンを立切（41オ）はわらはが最期菅三君。草葉のかげより御出ッ世を。待チ参らせん。おさらばへいつ迄も〳〵名残リおしの御姿と。打守リ〳〵。南無阿弥陀仏と用意の懐剣。待テと一ト声奥の間より刃をからりといら高珠数。誰レ人成ルぞと見返れば良峯左衛門宗貞。鳥帽子脱捨首立テ衣。武家を離れし如法袈裟いと殊勝げに歩み出。昔にかへる僧正遍照。経文の功力によつて剣難を遁るゝは。刀刃断々懐の珠数の徳人を救ふは出家の道。ましていはんや血をわけし娘軒端。無事で有ッたな。我レ其昔。惟高親王の傅にて名虎とは傍輩なりしが。親ン王を位イに立テ我ガ意を（41オ）振はん名虎が工み。非道に組ミせぬ此宗貞。日觸の御誕生天ン子には立テられずと。道を守ル某を却て不忠。二タ心と疑ふ邪念。其疑ひを晴さん為。三才の其方を名虎が養子に遣はせしは。親しみをかけて悪ク心ンをため直さん志。縁者の異見も聞カばこそ弥募る位イ諍ひ。勝負に負しを憤り。逐電仕たる悪ク人に養れたるそちが因果。誠の親の有ル事は今迄はよも知ルまじ。ふしぎに今ン日廻り逢イ是善卿の本ン心ンを。承はつて心の安堵。敵に随ふ諂ひ鳥帽子誠を顕はす遍照が娘の軒端。自害には及ふまじと丸ふ治る僧正の。真実しんみ疑ひなき。

扨は父君成リけるかと衣の袖に。血脉の涙。ア、不覚也（42オ）遍照。親子の名乗は私ン事。使者に立ッたる宗貞殿。娘が成

敗御覧に入レん。桂参れと声の下。アイと答る娘より。胸に答へて諸共に露ときへたき庭の面。父上母様おさらばと手を合せたる花の顔。盛りの紅梅折リ取ッてはつしと打テば花ちつて庭に血をなす皆紅ひ。我ガ子の愛は花に喩ふ。殊更梅は花の兄。惣領娘の此花を只一ト打チに散せし上は。成敗済ンだ此死骸。取片付ケよとあたりなる莞筵を手づから打かづけ。親子の縁を切ッたる手打。此世の対面叶はねば。何国に有ッても死人同然。魂此家を抜ケ参り。最前帰つた同行に早追ッ付ケとつど〳〵に。云でこもりし父の恩。母上ェ有リ難涙ながら。娘（42ウ）不便ンと思し召親のお慈悲は厚けれど。名虎が下知にもれ給はゞお命の程も覚束なし。我カ子に替る親心。余り冥加恐ろしいと。親子左右に取リ付て歎くを払ひおろか〳〵。我レ有職の家に生れ。古今の式目神ン代の記録。胸に貯へそらんじたれば。我レを殺せば天下の鑑を絶す道理。譬名虎が威勢にて擒とはなす迚も。命を取事思ひも寄ラず。只危きは菅三殿敵キの聞コへ憚り有リ。暫しの間隠家は比叡山にて手習ヒ修行。僧正宜しく頼み入ル。ヲヽ元トより我は墨染の我カ立杣に道しるべ。非道の弓矢も。是限り。

是迄なりや天人の身は雲水と出て行。名残リは尽ず菅三君御身の母は（43オ）久方御前。我は今より軒端の梅。此後廻クり逢迚も。必ず母となの給ひそ。伯母よと呼で給はれと教かはらず河内の国。伯母君覚寿と申せしは誠は産の母さゞの。有とは見へて芦垣の隔たる中は。一ッ世の別れ暫しと呼ヒとめ僧正遍照。天津風雲の通ひ路吹とぢよ。乙女の姿暫しとゞめんと。一首の詠歌くり返し。五度かへす五節の舞。是善は仁義礼智信。文武斐蘭の唱歌の曲。いつか斗韋巾音信も雲に隠るゝ桂姫。親ならぬ親子ならぬ子。あなたの別れ。こなたの名残リ十三筋の縁ンの糸。ぬふてふ笠にひな鳥を。跡に残しておく露の。梅の愛樹は菅原の栄を。花に顕はせり（43ウ）